シンポジウム
「中国山地の旧石器文化を考える―移動生活と運ばれたモノ―」

《コーディネーター》

広島大学総合博物館教授　藤野　次史さん

《パネラー》

島根県古代文化センター長　丹羽　野裕さん

埋蔵文化財調査室　調査研究員　山田　繁樹さん

埋蔵文化財調査室　事業調整監　青山　　透さん

埋蔵文化財調査室　調査研究員　辻　　満久さん

川﨑　それではただ今から，シンポジウム「中国山地の旧石器文化を考える－移動生活と運ばれたモノ－」を始めます。

コーディネーターは，広島大学総合博物館教授の藤野次史さんにお願いしています。

藤野さんは，先ほどの講演にもありましたように，中・四国をフィールドにしながら，東アジア的視点で旧石器文化の研究を進められておられますので，幅広い観点から話も引き出していただけるものではないかと期待しております。

それでは藤野さんよろしくお願いいたします。

藤野　引き続き討論会ということで，進めていきたいと思います。

旧石器というテーマでどれぐらい人が集まるのかなと思って，随分心配していたんですけど，たくさんの方に集まっていただきまして，どうもありがとうございます。

それから，実は非常にたくさんの質問がきておりまして，これもちょっとびっくりしております。非常に熱心に聴いていただいているのだなというふうに思いました。質問の内容を見せていただきますと，一つは，石器の用語とか石器の用途に関する質問，それから幾つか技術的なことなどかがあります。それについては，既に午後からの講演の中でお話した部分もかなりあると思いますので，それでお答えしたということで省かせていただきたいと思います。

もう一つは，これから討論の中で扱う遊動とか，生活にかかわる質問がございます。会場からの質問を発表者の皆さんにも読んでいただいておりますから，それを討論の中にできるだけ活かせるような形で進めていきたいと思います。

時間も余りありませんので，今申しました二つのことから少し外れている質問を読ませていただきます。一つは，石器には有機物，例えば動物の脂肪等は付着していないのですかという質問がきております。幾つかの質問に答える形で進めていきたいと思います。多分付いていたと思います。実際には，それを検出しようとすると，発掘調査のときにそのつもりで取り上げないと，痕跡が非常に微弱ですから，なくなってしまうということが問題の一つです。また，大半のものはやはり検出が難しいというのが現状です。しかし，敲石という石器がありまして，これは植物質の食料を加工した道具だというふうに考えられていますけれども，それらについては，最近縄文時代の資料を研究している方がいらっしゃいます。旧石器時代の敲石にも一部確認できるものがあるんだというようなことをおっしゃっていますので，将来的にはどんなものに使ったかというのが，ひょっとしたらわかるようになるかもしれません。

それから，もう一つの質問は，今から何年前のその何年前とかいつのことか（発言者注釈：いつの時点を基準にしているのかという意味）という質問です。^{14}C年代の場合には，1950年を現在として，そこから何年前というふうに言っております。それから，一般的に何年前と言っているのは，今，この只今の時点を言っておりまして，約何年前，３万年前とか２万年前というのは，現在から数えてというふうに大体使って

いると思います。

旧石器と新石器の違いについての質問があります。ここで説明をすると長くなるんですけれども，一つは，石器のつくり方でもあります。日本の場合では，必ずしも磨製，打製で区別はできません。旧石器時代は既に磨製の技術はあります。これは，世界的に珍しい例ですけれども。

それから，多くの場合は，どんな食料獲得の方法を用いているかというところで旧石器と新石器をわけています。おおむね，農耕だとか牧畜の開始がされた時代が新石器，それ以前が旧石器ということになります。そういう意味では，日本の縄文時代はちょっと特殊です。

それから，旧石器人の服装についての質問がありますが，全くわかりません。日本の場合はわかりませんけど，諸外国のお墓の例から言うと，少なくとも一定緯度よりも高いところでは，かなり服を着用していたというのはわかりますし，シベリア等に関しては，恐らく靴もちゃんと履いていたと思われます。

火山灰と人類の生死，移動についてですけど，これは遊動の話とちょっとかかわると思いますが，火山の近くにいた大半の人たちは，恐らく死滅をしていると思います。死滅していなくても，そこではしばらくは生活はできませんので，恐らく別の場所に移動していると思います。そのために，大規模な火山噴火が起きた地域では石器の顔つきが変わったりすることもあります。

このくらいで当面の質問にはお答えしたということで，次に進ませていただきたいと思います。非常に時間が短うございますので，２つぐらいのテーマに絞って討論をしていこうかと思います。

１つ目は，午前中に広島県の中国山地の石器のお話をしていただきましたので，これに関連して，石器というのがどういう地域的な特徴を持っているんだろうかというところを検討していきたいと思います。２番目としては，旧石器時代の生活に関してです。旧石器時代は遊動生活で，これは，大体季節を単位に移動するものだというふうに考えられています。私の話の中で，季節としては夏と冬という２つ大きなサイクルがあって，その間に短い春，あるいは秋のような時期があったと思いますけれども，その２の季節を中心として採取できる植物だとか，移動する動物とかがいますので，そういうものを対象として狩猟をしていたと考えられています。今日，丹羽野さんのお話の中で，遊動のルートだとか範囲だとかいうかなり具体的なお話が出てきました。丹羽野さんの講演の中でも中国山地の広島県側の話も少し折り込んでいただいて，お話をされていましたけど，もう少し範囲を広げて遊動のあり方というのを発表者全員で検討をしてみようかと思っております。この２つについて，検討をさせていただきたいと思います。大体，１時間程度，もう１時間を切っておりますけれども，お話をしていこうかと思っております。

まず，この地域の石器の特徴のようなものというものを考えていくに当たって，丹羽野さんのお話の中でもありましたし，辻さんの話の中でも少しありましたが，石器の変化というのをまず押さえておこうというふうに思います。

まず，きょう只野原を発表していただきました青山さんに確認なんです。山田さんのお話された和知白鳥，それから辻さんの話の中に幾つか中国山地の三次盆地から庄原にかけてのお話が出てきました。只野原はそれら遺跡の中では一番層位的といいますか，複数の時期の石器群が出てきておりますので，確認の意味でどういう移り変わりになっているか簡単に御説明をお願いいたします。

青山さん，お願いします。

青山　只野原３号遺跡では，ＡＴ，姶良丹沢火山灰より上で出てきているものが，丹羽野先生などが書いていらしゃいますような，誰が見ても石器だというようなものが，

ほとんど出てきておりません。ＡＴの上であって，そのＡＴより下であっても，資料の18ページの第２次調査区で，黒曜石製のナイフ形石器１点が出てきておりますが，あとは，流紋岩の剥片などが出ているだけです。特に，ＡＴより下の配石遺構のところの打製石斧，これも流紋岩ということですが，黒曜石のチップがたくさん出たとかいうような状況ではありません。一応，分析結果では，ナイフ形石器の黒曜石が隠岐産だと聞いておりますけど，それぐらいで，なかなか石材の産地の特定はできていません。定型化した石器みたいなものがＡＴより下で出てきていないので，調査中で特異な遺跡だなと，いつの時期に当たるのかなというのは，結構問題にはなってはおりました。そんな状況です。

藤野　確認しますと，文化層は２面あると考えればよろしいでしょうか。

青山　旧石器の文化層としては，２面，ＡＴの上，それから下です。

藤野　ＡＴの下で，池田の上，大体５万年から２万5,000年の間に入るものが一つと，それからＡＴの上に関しては，浮布の下ですから，２万5,000年から１万7,000年ぐらいの間に入ってくるものが一つ。その上に縄文時代の初めぐらいの文化層があるというような形になろうかと思いますが。

青山　午前中も説明させていただいたのですが，池田と文化層３の粘土質土層の間に，現在，火山灰の分析された方は言っておられますけど，仮称「高野テフラ」が存在することが分りつつあります。もっと広範囲に調べ，時期を特定できるようにしたいという意見をもらっています。

藤野　少し手前みそで申しわけないんですけれども，私が発表した編年図を丹羽野さんが使っていただきましたので，時間的な物差しとして，この編年を使っていきたいと思います。129ページに中国山地の後期旧石器時代編年図があります。これにもしも

青山さん，はめていただくとすれば，ＡＴの下というのはどういうところにくるとお考えでしょうか。あえて，はめるとすれば。

青山　これは，ＡＴの下の部分と考えています。

藤野　あるいはここから外れてしまうとか。

青山　外れるしかなさそうだなと。打製石斧が間違いないんでしょうけど，打製石斧ができているということ，あとほかには剥片なんですけど，台形様石器と呼ばれるものはどうもないみたいなので，やっぱり無理やりいくなら，原田の７ａ，一番古いところぐらいなのかなと。

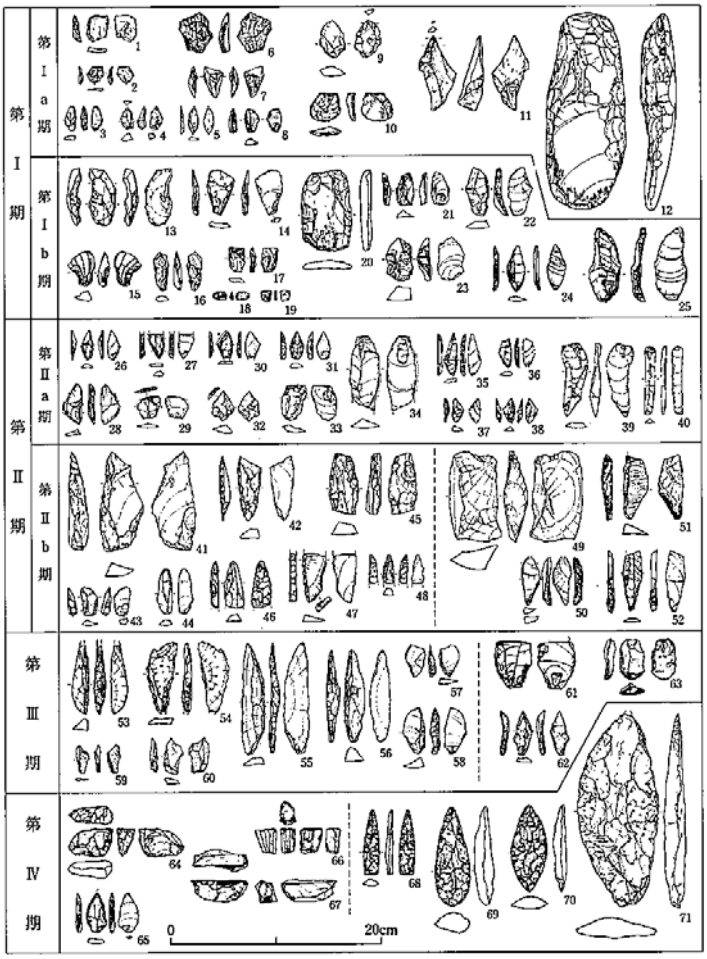

図２　中国山地の後期旧石器時代編年図（各報告書より）

1～5・9・12：鴻の巣遺跡　6・8・10・11：地宗寺遺跡　7：中山西遺跡　13・14・20：西ガガラ遺跡第１地点第１b期　15～19：野原遺跡群早風A地点Ⅱ期　21～23：野原遺跡群早風A地点Ⅰ期　24・25：戸谷遺跡第５地点　26～29・34：西ガガラ遺跡第１地点第２期　30～33：毛割遺跡　35～40：恩原１遺跡R文化層　41～46：冠遺跡D地点　47・48：西ガガラ遺跡第２地点第Ⅲ期　49・50：恩原１遺跡O文化層　51・52：フコウ原遺跡　53・54：冠遺跡A地点　55～58：恩原２遺跡S文化層　59・60：牧野遺跡第５地点　61～63：椋床遺跡G地点　64・65：恩原２遺跡M文化層　66・67：東遺跡　68～71：冠遺跡第10地点

図１　中国山地の後期旧石器時代編年図

藤野　原田の一番古いところですと，この編年図でいうと第Ⅰａ期のところになりますけれども，それよりも古くて，この編年表よりも古いという可能性もあるということでしょうか。

青山　個人的には非常に判断も何もつかないんですが，指導に来ていただいた先生方の意見では，その可能性も非常に強いなと。後期旧石器の前半と言えども，もう少し古いという人の意見もありました。案外，中期旧石器に入るのではないかというような言葉を濁しながら言われる先生もいらっしゃいました。

藤野　いろいろ評価はわかれるんだと思いますけれども，実はこの編年図の中に入っていない時期があります。午前中の辻さんのお話の中にできた下本谷の遺跡というのがございまして，私はこの編年図の一番古い時期より古く実は位置づけています。先の私の話の中でも少し出しましたけど，後期旧石器時代の初頭，もしくはそれよりもさかのぼるかもしれないという一群が実際にはございます。その辺のところをどうでしょう。辻さん，下本谷も含めて今の只野原の一番古いものをどういうふうに評価されますでしょうか。

辻　只野原の報告書を書くのは私なので，今の部分については，私のほうが話したほうがよかったのかもしれませんけれども，只野原３号遺跡の文化層３というところから出てきた尖頭状の石器と称している石器があります。それを見ると，その尖頭部分になる尖ったところを少し加工して，とがらせているというような感じで，それと，打製の石斧風の柄の部分ですよね。刃部は既になくなっていますので，柄の部分というのが配石の周辺から出ていて，それを見るとどうも57ページの旧石器の編年表での第Ⅰ期の第Ⅰａ期のちょっと上のほうにこぼれてしまいそうな，そういう感じが漠然とします。

下本谷の石器群というのも，かなりこの第Ⅰ期のⅠａの非常にコンパクトな小さいナイフ形石器とか，それからそういう石器を見ていくと，それよりも何となく荒っぽいというか，ちょっと異質な感じがして，人が全然違うのではないかというような感じを受けるくらい，そういう感じの石器なので，どっちがどっちとは言えないんですけれども，この第Ⅰａ期の枠の中よりは外れるとは，漠然とは思っております。

藤野　どうもありがとうございました。

石器の細かいお話をしてもなかなか分かりとは思

いますけれども，今のお話は，実は学会でも一番最先端の議論を聴いていただいております。日本における旧石器時代の始まりはどの辺かということを，この10年来，旧石器学会の中でも随分議論しているところでもあります。この129ページの編年図をつくった時には，まだ下本谷遺跡の報告が出ておりませんので，これの中には入れていないんですけれども，先ほど申し上げましたように，私自身はこの編年図の一番古い時期よりも一段階古くに置いております。先ほどスライドの中でもお見せしましたように，辻さんが荒い加工だというふうに表現されました。先端をつくり出しているという表現もあったと思いますけど，非常に厚い素材をつくって，先端を作り出すような特徴を持つ石器がありまして，恐らく一般的にナイフ形石器というものを使い出す，あるいは，台形様石器というものを使い出す以前に，どうもそうした石器群がありそうだということが，最近わかってきております。そういう意味では，只野原遺跡では，広島県で出ている石器群の中で一番古い一群になりそうなものが見つかっている，そうしたことが，何となく言えそうだということです。

それからもう一つ，ＡＴの上については，石器が余り少ないのでなかなか時期をはめにくいんですけれども，私の編年の中で言うと，第Ⅱａ期あたりにくるような石器が出ているということだろうと思います。

それでは，和知白鳥遺跡の石器ですけど，大体どのあたりに位置づけられていたか簡単にお願いします。

山田　午前中の中でもお話をさせてもらいました。

資料集では，９ページと10ページにそのあたりのことを書いております。小型のナイフ形石器と台形様石器，いびつな台形様石器の組み合わせ，129ページの編年図で言うと第Ｉａ期に相当するのではないかなというふうに考えております。

藤野　ありがとうございました。

以上，きょう発表していただいた遺跡についての評価というのを少ししてきました。今の発言も踏まえて，それからその他の石器群を含めて，広島県側の中国山地の東部の石器群をどういう変遷で考えることができるのか，あるいは，その特徴というのはどんなところにあるかということを，短い時間で説明をするのは難しいと思うんですけれども，辻さん，先ほどの発表の補足も含めて簡単にお願いできますでしょうか。

辻　一応私が調べた限りでは，大体，和知白鳥遺跡，段遺跡とかもそうですけれども，基本的に時間尺で言うと，129ページの藤野さんの編年図のおおむね第Ⅰａ期から，もしかしたら第Ⅰｂ期にいくのがあるのかもしれないですけど，一応そこら辺に当たるものが多いような気がします。特に，ナイフ形石器の場合は，俗に寸詰まりといいますか。余り小型で，割と加工も一側縁というか，側縁部が少し加工したようなもの。こんなの本当に使えるのかなというぐらい小さいのが比較的多いですよね。

あと，特徴といっては，斧型の石器がそれについていると，それと，先端をとがらせた錐状の，これも小さい石器が多いんですけれど，そういうのがある。そういうのがＡＴより下から出てくるという，そんな感じがします。上のほうは，ちょっとわからないというか，今回ほとんどないんですよね。逆に言うと。ＡＴの下の石器は多いんですけれども，ＡＴの上の石器は出るには出ているんですけど，非常に少なく，散在的であるというので，ちょっとまとめようが今のところはない。

藤野　これまでも三次盆地，あるいは庄原で採集資料とか，遺跡を掘ったときに１点，２点出るような，断片的な出土状況ではあったと思うんですけれども，ナイフ形石器の後半期の資料というのは，現状では非常に少ないというのが改めて確認できたと思います。石材の面で中国山地の石器群の特徴みたいなものが，主にナイフ形石器の前半期ということになろうかと思いますけれども，何かありますでしょうか。

辻　石材のほうでは，特徴というか，よく使われているのは流紋岩。それから石英，それから水晶。製品としては，玉髄を製品にしちゃうとかいうのはありますけれども，余り数はないです。流紋岩，それから水晶，石英，このあたりが圧倒的に多いのが特

徴だと思います。言いかえると，身近な石材を使っているというのが特徴になるのかなと。

藤野　今，石材の特徴を挙げていただきました。石材には火山岩とか堆積岩とか，それから鉱物系のものとか，幾つかのものがあります。産地はなかなかわからないのですが，近くの河川とか山の断面とか，そういうところにあるものだと考えればよろしいでしょうか。

辻　そうだと思います。わりと，近場にあるのを使っているのだと。

藤野　そのほかに，石材としては少ないですけれども，もう少し離れたところの石材というのはどんなものが入ってきているんでしょうか。

辻　離れたところの石材で言うと，黒曜石とか，安山岩，前々から言っている玉髄系の石材の３つになろうかと思います。

藤野　玉髄に関しては，なかなか分析は難しいとは思いますけれども，実際に資料をごらんになったと思いますので，このあたりは丹羽野さんに少しコメントをしていただきたいと思います。そのほかの黒曜石については，幾つか分析例があると思うんですけれども，安山岩はどうでしたかね。なかったかもしれません。その辺の分析例があればちょっと教えていただけますか。

丹羽野　安山岩は，一応原田遺跡で分析しているんですけれども，これは冠山の原石を使用したんだろうという科学分析の結果はきております。

藤野　黒曜石は，隠岐の久美とかそのあたりだったですかね。いずれにしても隠岐から黒曜石を持って来ている。距離にして200km弱ぐらいですかね。かなり離れたところから持って来ている石材も入っているわけです。この辺の評価は人によって違うかもしれません。

それでは，先ほど中国山地の西部も少し含めながら，辻さんにまとめていただきましたけれども，広島県側の，中国山地の石器群の特徴を抽出するために，丹羽野さんのほうから幾つかコメントをお願いします。今日，お話をしていただいたことを踏ま

えながら，中国山地の南部側，あるいは東部側，西のほうはなかなかはっきりわかるものはないとは思うんですけども，周辺の地域の石器群と比較をしながら，中国山地の南側の石器群というのを少し評価していただければと思うんですが。

丹羽野　なかなか難しい御質問ではあります。時期は要するに同じような時期ですね。

藤野　槍先形尖頭器の時期がありますけど，ナイフ形石器の後半期以降の石器群は除いて，ナイフ形石器の前半期のものに限ってということで。

丹羽野　そうですね。少なくとも，古い時期，例えば藤野先生のⅠ期ぐらいのものについては，組み合わせであるとか，形状であるとかに関して言うと，お互いに資料が多いわけじゃないにしろ大差はないんですね。台形様の石器をつくったり，石斧をつくったりしていて，これは山陰や中国山地東部と一緒という範囲を越えて，恐らく主に日本列島全体，実はナイフ形石器の前半期，特に古いところは非常によく似た石器を使っているということと連動しているんだろうと思います。ただ，山陰の石材の動きなどと，それこそ原田遺跡の恐らく第Ⅰ文化層あたりは，非常にたくさんの黒曜石を持って動いてきていますよね。こちらのほうは，非常にたくさん多くが地元の近傍の石材を使っているのに比較をすると，その辺，やはり遊動範囲の分水嶺みたいなものが。もしかしてあるのかもしれないみたいな。感想は持ちますけれども，これもちょっとまだ広島県内の事例が少ないだけに，そこまで結論づけるのは難しいのかなという気がいたします。

それから，報告のときにもちょっと申しましたが，沖さんの研究では，やっぱり東側はナイフ形石器がちょっとあったり，といった部分で微妙な地域色はあるんではないかというような議論をされてもいますので，実際に私が報告しましたような，ああいうようなルートの二分性みたいなものがあるとするならば，そういった細かな地域

性というのが生じている可能性は十分あるのではなかろうかと思います。後半期ほどではないにしろ，東と西では多少の石器群の組み合わせの違い，あり方の違いといったものが多少はあるのかもしれないなという気はいたします。

藤野　そのあたりは，石器をどういう順番で並べるかというときにも随分頭を悩ませるところだと思うんですけれども，その話をし始めるといろんなことを説明しないといけなくなりますので，あまり踏み込まないことにはします。概括的な話をしますと，今，丹羽野さんが発言されたようなことになります。つまり，一番古い段階，ナイフ形石器の前半期の段階でも，特に特徴となるナイフ形石器を取り上げますと，それなりに違った様子を示しています。先ほど，辻さんがおっしゃったように，中国山地西部は，非常に小型のナイフというのが特徴的にあります。私が説明したときには，ナイフ形石器は狩猟具の一種だと言いましたけど，単体ではそれが狩猟に使えるような道具だとはとても思えないような，非常に小型のナイフが特徴的にあります。これは，原田あたりでもそうなのかもしれませんが，よくわかりません。中国山地の東部へ行きますと，今回は丹羽野さんはあまり説明はされませんでしたけれども，小型のナイフと同時に，一定の大きさ，普通サイズですね，５センチとか６センチサイズのナイフ形石器が古い段階からあります。ただし，形の整った素材は使っていません。先ほど説明しました縦長剥片，縦長剥片と横長剥片について少し説明する必要がありますね。上から打撃をすると考えてください。打撃方向に平行して長く取れるのが縦長剥片とか石刃とかいいます（図２の左）。それに対して，上からたたいたときに，横に長く取れる剥片，これ横長剥片といいます（図２の右）。中国山地の東部は，石刃はないんですけど，わりと縦に長い剥片を使って，一定の大きさのナイフというのをある程度古い段階からつくっています。それに対して，中国山地の西部，三次盆地のあたりははっきりよくわかりませんけど，この地域を含めてやはり非常に小型のナイフ形石器が多いというような特徴があります。だから，そういう一番古い段階で地域差があると。丹羽野さんが隠岐産黒曜石のあり方が中国山地の東と西で違うようなこと

を話されたのは，そういう意味です。こうした地域ごとの違いを前提とすると，この後で議論する遊動の範囲についても，ものすごく広い範囲，例えば，冠から隠岐へ行って，隠岐から国分台に行って帰ってくるような，さすがにそこまで広い遊動ルートではないんじゃないか，ということであります。

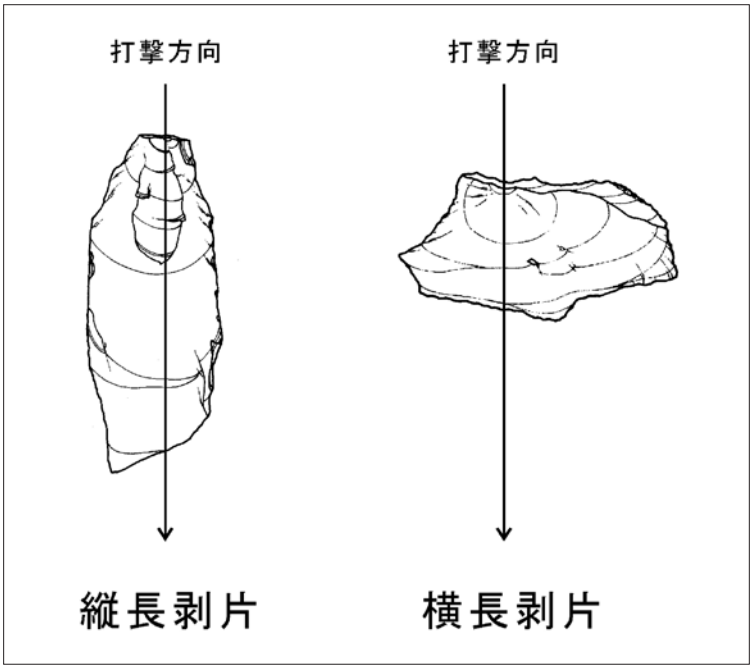

図２　縦長剥片と横長剥片の違い

次に，後期旧石器時代前半期と後半期の違いについて少しまとめさせていただきます。丹羽野さんがおっしゃっていたように，台形様石器を特徴とする前半期は，わりと日本全国どこで調査しても，もちろん地域によって石器群の顔つきは少し違うんですけれども，同じような組み合わせで出てくる。台形様石器が主体になって，それにナイフが組み合って，石斧が組み合うというような，基本的な組み合わせを持って出てくる。これは，お互いに情報交換をしている。かなり広い範囲を遊動して情報交換をしているので，細かなところでの違いはありますけれども，大きく見ると地域性が出にくいような状況になっているということだろうと思います。

後半期の話が，今日はあまり出てきませんでした。なかなか難しいのですけれども，辻さん，冠で見た場合，後半期の様子というのはどんなふうになるのでしょうか。

辻　後半期の様子，例えば，冠遺跡，私はぱっと見ただけなので，そんなにわからないんですけれども，冠遺跡の場合は，横長の剥片を定型的につくる，すごくシステマティックというか，そういう特定の技術にのっとった石器製作の体系みたいなのが，がしっと決まってしまうようなイメージを持っています。

ほかのところがよくわからないので，何とも言えないんですけれども，冠遺跡に関しては，一応そんな感じだとは思うんですが，どんなものですかね。

藤野　ありがとうございます。

冠遺跡というのは，御存じの方も多いとは思いますけれども，広島県の西北の端にある安山岩の原産地です。その冠の様子を少しお話をしていただいたのですけれども，ナイフの後半段階では，先ほど説明した横に長い剥片をたくさんとって，それをナイフ形石器やほかの石器にするという特徴があるということです。

この横長の剥片をたくさんとる地域というのは，実は，瀬戸内の低地を中心に広がっています。今は海の底になっていますから確認できませんが，そこにも遺跡がたくさんあるんだと思いますけれども，その当時としては，山の上といいますか，そういうところにある遺跡が今見つかっています。現在の地理区分で言うと，瀬戸内の沿岸地域を中心に広がっている石器文化です。これは，後半期です。瀬戸内ではほとんど古いものが見つかっておりませんで，前半期の様相ははっきりわからないんですけれども，少なくとも後半期では，瀬戸内で広がっている特徴的な石器群が，中国山地，冠のあたりまでは入ってきているということです。

辻さんは，あまりおっしゃいませんでしたけど，三次盆地では，ほとんど後半期のものがわからないので，どうなるのかわからないんですけれども，点々とは入ってはいるというような状況だと思います。

広島県側の状況と比べると，中国山地を越えるとどんな状況になるのでしょうか。丹羽野さん，お願いいたします。

丹羽野　山陰地方に関して言うと，原田遺跡に関して言うと，後半期でも古いところは，角錐状石器がまとまって入ってきていて，恐らく西からいろいろな情報が入ってくる中で，独特の石器群が形成されていて，横長のナイフなんかも入ってきている。それは恐らく，冠の石材が入ってきたり，あるいは一部，国分台からも入ってきているものもあったりするので，山間部のほうになってくると，やはり石材の供給のあり

方によっては，同じように横長の石器も，それなりに中心的には占めております。

ただ，沿岸部になってきますと，同様に横長の，例えば瀬戸内技法と呼ばれる小型ナイフ形石器を作る技法で作られた石器ですね。典型的な東部瀬戸内というようなものも結構出るんですよ。ただし，余り石器群の中に混ざって出るというよりは，断片的に出る。単独でぽんと出るという感じ。余り数は少ないんだけれども，一般的な遺跡で言うと，やはり黒曜石や玉髄を中心的な石材にして，横長というよりは，やっぱり石材にマッチした縦に長い縦長の剥片を剥離するようなもののほうが，北側では，中心に展開をしているんだろうというふうには考えています。

ただ，恩原遺跡のＳ文化層，石材の分析でもありましたように，後半期の遊動の動きも結構南北にかなり広く，隠岐から備讃瀬戸まで動きますから，そういう意味で非常に瀬戸内の色合いが濃いものも出るということなんだろうと思っております。

藤野　今，恩原の話も含めて少ししていただきましたが，恩原の西側に位置する蒜山高原なども含めて少し広い範囲で考えてみます。三次，庄原のあたりはよくわからないんですけれども，蒜山とか恩原などの岡山県の北部の状況は，角錐状石器の時期に，実は角錐状石器はほとんど分布しないような状態です。

石材搬出の流れとしては，確かに香川県のほうから中国山地側へ上がってくるんです。時期的な空白はないんだけれども，角錐状石器は出土していない。その辺は，山陰の状況と岡山県の北部の関係みたいなものは何かお考えがありますでしょうか。

丹羽野　そうですね。その辺の，例えば原田遺跡の角錐状が非常にたくさん多いという状況との違いについては，やっぱりそれは冠山には結構ありますよね。九州に近いということもあるんでしょうけれども。そういうやっぱり流れの中での一つのあり方で，それがやっぱり，後半期になっても西部，東部の中での微妙なやっぱり縦長，横長みたいなくっきりとした地域差と，今度は東西からのいろんな石材や人の文化の流れの中での特定の石器の利用のあり方の違いみたいなものが，反映をされているんだろうなという感覚では思っております。でも，それはぴしゃりととまるというもので

はなくて，あくまでも微妙にグラデーションを持ちながら，地域色，大きな地域色の中に細かな地域色をだんだん，そういう格好で出していっているんだろうなというような感じで見ておりますけども。

藤野　後半期になると，かなり地域的に特徴的な石器群というのが出てきて，地域的なまとまりというのが追いやすいんですけども，それが必ずしもここで線が引けるという状態でもないですし，かといって同心円的にぼやけていくというわけでもないということが実態であります。それは，石器群の背後にある人間集団というのが，単独で遊動しているわけではないことの反映だと思われます。一つの集落の人間がいつも固定的かどうかわかりませんけれども，例えばある程度固定的な状態で遊動しているとしても，時期が来れば，もちろん婚姻もしますし，ある場合には，隣接集団で一緒に狩猟をしたりします。そういうところで，情報伝達とかいろんな物が交換をされていきますから，もちろんぱっと見て，ここで線を引けますよという形ではない，人間集団や物などが錯綜した状態のあらわれだというふうに思います。

今のお話の中で，必ずしも石材が同心円的に広がっていくわけではないことを，ぼんやりとですけど，少しおわかりいただけたかとは思います。だんだんと遊動の話のほうへ主体が移ってきましたので，もう少し詰めていきたいと思います。なかなか後半期の状態がわからないので，どういうふうに人が移動していたかという話というのは，難しいところはあろうかと思いますが，丹羽野さんがかなり積極的に遊動ルートというのを示していただきましたので，それに乗っかりながら少しお話を進めていこうかと思います。原田遺跡自体は，冠遺跡から言うと随分東のほうに離れています。後半期はあまり遺跡はないので，今後の資料の蓄積によって状態が変化するかもしれませんが，冠から同じ距離にある三次盆地だとか，あるいは少し遠い距離にある庄原では，どうも前半期では安山岩の分布が希薄な状態になっています。そうした場合に，人々の移動のルートは，原産地と，例えば自分たちが基盤としている地域との間の往還型（発言者注：石材原産地と生活根拠地を中継地をいくつか挟みながら直線的に移

動するような遊動スタイル）なのか，あるいは，地域全体を面で動くような形なのか。もしもその辺で考えておられることが丹羽野さんございましたら。

丹羽野　そうですね。少なくともきょう私がお話をした石材のあり方からすると，大きくぐるりと回っていれば，ああいう石材のあり方は余り見られないだろうと。となると，どちらかというと，一定の幅を持った往還型みたいな，こういう二点間の往還かどうかは別にして，一定の幅の間の中の循環といいますか。大きな循環じゃなくて，一定の幅を持った往還的なイメージで捉えたほうが，ああいう石材のあり方はわかりやすいだろうと。大きく丸く動こうと思うならば，それこそなかなか香川から冠山まで行くのは難しいかと思います。何か中間に一つでも補完的な石材でもあれば，十分可能な三角形なんだろうと思うんですけれども，でもそれは，余りなさそうですよね。二つの石材の混交というのが。そういうところを見ると，一定の幅を持った往還型みたいなイメージを考えているというところです。

藤野　辻さんばかりに振って申しわけないんですけど，何かお考えはございますか。

辻　三次盆地の周辺で，ＡＴより上というか，後半期の石器が少ないのは，発見されていないというのもあるかもしれないんですけれども，例えば只野原とか，向泉川平とか，後半期に該当するその中から石器が発見はされているんですけれども，非常に数が少ないんですよね。数が少ないんですけれども，向泉川平１号遺跡の場合は，これは黒曜石です。分析はされていて，多分これは隠岐じゃないかなと思うんですけど，そこまで今は報告書を作成中でパラリとだけ読ませていただいたので，記憶していないんですけれども，そういう感じで条件が整えば，補完するような場所が存在している可能性は十分にあるんだろうと思います。今のところは，ものを通して人が動いたどうのこうのというのは，ちょっと後半期では考える資料はちょっと少ないかなというのが，正直なところです。

藤野　ありがとうございました。

そろそろ時間もきましたので，まとめる時間になってきました。今お話の中で，幾

つか出てきましたが，丹羽野さんには，何箇所かを経由しながらの往還ルートみたいなものが存在したのではないか，石材原産地を中心とした同心円的な遊動，かなり広い範囲全体を面的に回っているのではないのではないかということを示していただきました。

遊動の内容を検討するために，きょうは石材のパーセンテージでお話をしていただきました。それに加えて，石器の内容ですね，例えば，その遺跡の中でどんな作業をしているのかとか，石材がどういう持ち込まれ方をしているのかというようなことを検討していく必要があろうかと思います。黒曜石に関しては，私は幾つか検討をしたことがありまして，前半期ではかなりストレートに入ってくる。それは，どうしてかと言いますと，石器群の中に石核が一定の割合で存在するということ，それから原石の石材の大きさが小さいからでもありますけれども，原石の表面が残っているものが一定量あるということなどが理由です。ストレートではないにしても，原産地から黒曜石が出土した遺跡までの経由地が非常に少なくて，100km以上の距離を石材が動いているというような状況があります。それは，丹羽野さんがおっしゃったような，わりと直線的な動き方を考えたほうがいいんだろうと考えたわけです。

それから，原産地と自分たちの生活の場の関係で見ると，どこが自分たちの生活の場かという問題がありますけれども，同心円的に石材分布というのは広がらないんですね。例えば，安山岩の原産地で，近畿地方に二上山というのがあります。これは，奈良県と大阪府の境にありますけれども，これは瀬戸内側とか，それから京都方面に向かってはかなり広がりを持っていますが，奈良盆地を越えて，三重側にはほとんど広がっていきません。ですから，これは西とか北に向かって広がりを見せるが，南側や東側に向ってはあまり広がりを持たない。国分台のサヌカイトもわりとそういうところがあります。四国山地を越えては，広がっていきません。冠もどっちかというと，現状では島根県側にはあまり広がらなくて，山口県の宇部方面に向けて広がりを持っています。それぞれの地域で石器の顔つきが少しずつ違うところを見ますと，全ての

時期にそう言えるかどうかはわかりませんけれども，丹羽野さんが提示されたような移動のあり方の一つが見えてきているのではないかというふうに思っております。

最後に，遺跡，あるいは石器から見て，生活の様子というのがどの程度わかるかということで，お二人に質問をして終わりにしたいと思います。

一つは，山田さんにお伺いをします。私の話の中でもしましたが，旧石器時代も植物質食料をある程度利用していると思われます。これに関連して，お話の中でもありましたが，和知白鳥遺跡でたくさん出てくる敲石の評価というものをもう一回していただきたいというのが一つです。

それから，丹羽野さんにお尋ねをします。原田遺跡の第３文化層といいますか，ＡＴの上の文化層で，たくさんの削器，掻器というものが出てきております。こうした状況をどういうふうに評価できるか。その辺をお二人にお尋ねをしたいと思います。よろしくお願いします。

山田　私の資料の８ページを見てください。

８ページの表の中に，調査で確認をした石器，点数が書いてあります。その中で，右，流紋岩の右下のほうにハンマーストーンの点数が書いてあります。これと，打製石器との比率を出したのが，14ページの表になっています。ほかの遺跡に比べて，敲石の量が圧倒的に多いというのが，この表を見ていただくと一目瞭然ということになろうかと思います。午前中にもお話させてもらったんですけど，今までは，狩猟生活が中心だったような石器が出土している遺跡が多いんですが，和知白鳥遺跡ではそうではなくて，一定量以上のこういう大型のハンマーストーンが出ていることから，従来言われているような生活の様式ではなくて，植物質のようなものを食用につぶす行為の比重が高い。今までの狩猟中心の生活像から少し変わるような感じを示すものではないのかなというふうに考えられます。

藤野　ありがとうございました。

季節みたいなものも関係するかもしれないですね。

では，丹羽野さん，簡単にお願いします。

丹羽野　本当にたくさんのスクレイパーが出ております。これは，どういう観点で理解をするかというのは難しくて，例えば同じような遺跡があるかというと，私が知っている範囲で近辺だと，岡山県の東遺跡とかも非常に多くのスクレイパーが出ている。ただ，時期はちょっと新しいですよね。漸移層の時期で，あれは細石刃の時期。ですから，より新しい時期にスクレイパーが増えていくような，何がしかの社会的な変化があるのかどうかというのが一つ理解の仕方としてはあるとは思うのですが，そうは言いつつ，世の中の石器群を雑駁に眺めたときに，一つの遺跡からスクレイパーばかりいっぱい出るというのが，新しくなれば一般的か，というとそういうわけじゃないように思います。一つの考え方としては，遺跡の中で出てきている石器群のあり方というのは，人間の生活のあり方の中の一断面が出ている。人間生活の全てがそこにあらわれているわけではない。

特に，旧石器時代は遊動していますから，特に普通は，私たちは定住しているから家を一つ明らかにすると大体，私たちの生活がものから見えるものは，全部見えるわけで，縄文や弥生なんかも火事で焼けたりすると結構見えたりする。ところが，旧石器時代の場合は，遊動するので，いろんなところどころによって行う生活の場面というのは，違う可能性があるということも当然考えなくてはいけない。

しかも原田遺跡の場合は，ナイフ形石器が非常に少ない。多分，これは連動した事柄だとするならば，原田遺跡第３文化層が一つの石器文化だと仮定した場合ですけれども，たまたまスクレイパー，そういう木や骨や，あるいは皮といった日常の狩猟以外の必需的な作業を主に行った痕跡が，残されているというふうな考え方のほうがいいような気がしますし，また，スクレイパーそのものは，余り定型的ではないんですよね。何か，臨機的な感じで適当なスクレイパーも多くて，それを持っていつも歩いているというよりは，その場でする作業に合わせて石器をつくって，何かの作業をしているというような，どっちかというとイメージで，私は原田遺跡の一番上の層のス

クレイパーの多さは理解をしています。

藤野　ありがとうございます。

　どちらかと言うと，まとめていただいたようなお話で，非常によかったと思います。非常に短い時間だったんですが，旧石器時代のイメージが少しはできたでしょうか。あるいは，変わったでしょうか。まだまだ，いろんな問題がたくさんあって，これから資料を蓄積していって，いろんな検討をしていかなければいけない問題が山のようにあるということもわかったということだと思います。

　今日は，短い間でしたけれども，熱心にお聴きいただきまして，どうもありがとうございました。これで，討論会を閉めたいと思います。

川﨑　藤野さん，丹羽野さん，山田さん，青山さん，辻さん，ありがとうございました。会場の皆様，いま一度，盛大な拍手をお願いいたします。

　会場の皆様には，長時間にわたり，御静聴いただきましてまことにありがとうございます。これをもちまして，「平成24年度ひろしまの遺跡を語る　中国山地の旧石器文化を考える－移動生活と運ばれたモノ－」のシンポジウムを終了させていただきます。

引用図版

図１　藤野次史・多田仁「中国・四国地方」『講座日本の考古学Ⅰ　旧石器時代（上）』2010年　青木書店　第２図より作成

図２　藤野次史氏作成

閉会あいさつ

埋蔵文化財調査室長　伊藤　　実

閉会に当たりまして，一言御挨拶を申し上げます。

本日は，大変お忙しい中，基調講演とシンポジウムのコーディネーターを務めていただきました広島大学の藤野次史先生，また，雪の中国山地を越えて，はるばる島根県からお越しいただきました丹羽野裕先生には，資料作成の段階から，準備，企画等に当たりまして，いろいろ御指導いただきまして，まことにありがとうございました。お陰でこのような盛大の会になりましたことを関係者一同，心から感謝したいと思います。

今回は，ひろしまの遺跡の中でも，最近，中国横断自動車道尾道松江線の建設に伴って，広島県北部で，発掘調査を進めてまいりました。旧石器時代の遺跡について，当時の人々の暮らしと，モノの移動という視点で考えてまいりました。

今日，お話しがありましたように今から２万年前，あるいは３万年前という，はるか大昔のようなお話ではございましたが，歴史をさかのぼりますと，人類が２本足で歩き出したのは，今から700万年前だそうです。石の道具をつくり出したのは，250万年前と言われておりまして，そういうことから考えますと，今日，お話がありましたひろしまの旧石器時代の遺跡，2万年，3万年というような，どちらかというとそんなに古くないのではないかというようなふうにも思えるわけでございます。また，2万年，3万年というスパンで考えますと，私どもの一生というのは非常に短いわけでございますけれども，そういう短い一生の中にも紆余曲折，浮き沈み，栄枯盛衰がございます。そういう人の一生と比べまして，人類の歴史にも何十万年の人類の歴史の中には，たくさんの紆余曲折，いろんな歴史の曲がり角があったわけでありまして，そういう人の歴史の曲がり角を一つひとつ尋ねていく，あるいは，その真実を明らかにしていくということは，これから明日，明後日ではなくて，100年，あるいは200年先の人類の未来を見通すというような点では，いろいろ示唆に富むところもあるのではなかろうかというふうにちょっと考えた今日でございました。

さて，私どもの教育事業団の埋蔵文化財調査室では，このような身近な発掘調査の成果や最新の考古学の成果，そういうものを素材に，私たちが暮らす広島の歴史の解明と新たな視点の提供など，そういう皆様の興味に応じれるような，いろいろな素材を提供してまいりたいと思っております。今後とも御支援，御協力，御理解を賜りますように，よろしくお願いいたします。

最後になりましたけれども，本日は早朝から長時間に渡りまして，御静聴いただきました皆様に，心から感謝を申し上げまして，閉会の御挨拶とさせていただきます。

これまでの『ひろしまの遺跡を語る』略年譜

昭和62年７月19日	【広島県立社会教育センター】	『ひろしまの遺跡を語る－最近の発掘調査成果報告－』
	（記念講演）	『広島県の考古学』潮見浩（広島大学教授）
平成２年２月４日	【広島県立生涯学習センター】	『ひろしまの遺跡を語る－昭和63年度発掘調査の概要－』
平成２年９月１日	【広島県情報プラザ】	『ひろしまの遺跡を語る－平成元年度発掘調査報告会－』
平成３年２月１日	【広島県情報プラザ】	『ひろしまの遺跡を語る－平成2年度発掘調査報告会－』
平成４年10月30日	【三次市文化会館】	第１回『ひろしまの遺跡を語る－平成３年度発掘調査報告会－』
平成５年２月６日	【広島県民文化センター】	第２回『ひろしまの遺跡を語る－平成３年度発掘調査報告会－』
平成５年11月20日	【広島県立歴史博物館】	第１回『ひろしまの遺跡を語る－平成４年度発掘調査報告会－』
平成６年２月５日	【広島県民文化センター】	第２回『ひろしまの遺跡を語る－平成４年度発掘調査報告会－』
平成６年７月23日	【三次市文化会館】	第１回『ひろしまの遺跡を語る－平成５年度発掘調査報告会－』
平成６年９月24日	【広島県民文化センター】	第２回『ひろしまの遺跡を語る－平成５年度発掘調査報告会－』
平成７年８月20日	【広島市南区民文化センター】	第１回『ひろしまの遺跡を語る－平成６年度発掘調査報告会－』
平成７年９月30日	【広島県立歴史博物館】	第２回『ひろしまの遺跡を語る－平成６年度発掘調査報告会－』
平成７年11月11日	【広島県立歴史民俗資料館】	第３回『ひろしまの遺跡を語る－平成６年度発掘調査報告会－』
平成８年10月19日	【三次ロイヤルホテル】	第１回『ひろしまの遺跡を語る－平成７年度発掘調査報告会－』
平成８年11月10日	【広島県民文化センター】	第２回『ひろしまの遺跡を語る－平成７年度発掘調査報告会－』
平成８年11月16日	【広島県立歴史博物館】	第３回『ひろしまの遺跡を語る－平成７年度発掘調査報告会－』
平成９年10月26日	【広島県民文化センター】	『ひろしまの遺跡を語る－平成８年度発掘調査報告会－』
	（基調講演）	『人骨が歴史を語る』松下孝幸（土井ヶ浜・人類学ミュージアム館長）
平成10年10月18日	【広島県民文化センター】	『ひろしまの遺跡を語る－設立20周年記念－』
	（基調講演）	『考古学からみた邪馬台国時代』石野博信（徳島文理大学教授）
平成11年11月21日	【広島県民文化センター】	『ひろしまの遺跡を語る』
	（特別講演）	『現代の科学から歴史が見えてくる』三辻利一（奈良教育大学教授）
平成12年11月19日	【広島県民文化センター】	『ひろしまの遺跡を語る』
	（特別講演）	『海のシルクロードと東西文化交流』櫻井清彦（早稲田大学名誉教授）
平成14年２月24日	【広島県民文化センター】	『ひろしまの遺跡を語る』
	（特別講演）	『前方後円墳のはなし』近藤義郎（岡山大学名誉教授）
平成14年11月３日	【広島県立生涯学習センター】	『ひろしまの遺跡を語る』
	（特別講演）	『宇那木山古墳群の発掘調査からわかったこと』
		古瀬清秀（広島大学大学院教授）
平成16年１月17日	【広島県民文化センター】	『ひろしまの遺跡を語る』
	（特別講演）	『文化財の保存と活用』河瀬正利（広島大学大学院教授）
平成16年12月26日	【広島県民文化センター】	『ひろしまの遺跡を語る』
	（講　　演）	『戦国時代史研究と遺跡調査』岸田裕之（広島大学大学院文学研究科長）
平成18年１月７日	【アステールプラザ】	４法人共同企画『新春放談　初夢ひろしまの城物語』
	（基調講演）	『ひろしまの城』三浦正幸（広島大学大学院教授）
	（シンポジウム）	『発掘されたひろしまの城を語る』
平成19年１月６日	【アステールプラザ】	４法人共同企画『新春放談　ぶらりひろしま江戸の旅』
	（基調講演）	『街道筋の暮らしぶりにみる「エコ」生活』石川英輔（作家）
	（シンポジウム）	『ひろしまの江戸時代を掘る』
平成20年１月12日	【アステールプラザ】	４法人共同企画『新春放談　飛鳥美人なに想ふ』
	（基調講演）	『ニューファッションへの道』増田美子（学習院女子大学教授）
	（シンポジウム）	『ひろしまの装・飾・美をさぐる』
平成21年１月10日	【広島県立生涯学習センター】	『平成20年度ひろしまの遺跡を語る』
	（講　　演）	『最近の発掘調査からみた広島県の古墳』古瀬清秀（広島大学大学院教授）
	（シンポジウム）	『ここまでわかった広島の古墳時代』
平成22年１月16日	【広島県立総合体育館】	『平成21年度ひろしまの遺跡を語る』
	（講　　演）	『卑弥呼と箸墓古墳』春成秀爾（国立歴史民俗博物館名誉教授）
平成23年１月８日	【広島県民文化センター】	『平成22年度ひろしまの遺跡を語る』
	（基調講演）	『安芸・備後の古墳と古代国家形成』松木武彦（岡山大学大学院教授）
	（シンポジウム）	『古墳時代の暮らしと心』
平成24年１月21日	【広島県民文化センター】	『平成23年度ひろしまの遺跡を語る』
	（基調講演Ⅰ）	『朝鮮半島，吉備，そして備後の寺々』亀田修一（岡山理科大学教授）
	（基調講演Ⅱ）	『百済僧弘済の三谷寺をさぐる』松下正司（比治山大学名誉教授）
	（シンポジウム）	『古代の東アジアとひろしま－白村江の戦いと寺町廃寺－』
平成25年１月19日	【広島県民文化センター】	『平成24年度ひろしまの遺跡を語る』
	（基調講演Ⅰ）	『旧石器時代の環境とくらし』藤野次史（広島大学）
	（基調講演Ⅱ）	『山陰から中国山地の旧石器文化』丹羽野裕（島根県古代文化センター長）
	（シンポジウム）	『中国山地の旧石器文化を考える－移動生活と運ばれた－』
平成26年１月11日	【広島県民文化センター】	『平成25年度ひろしまの遺跡を語る』
	（基調講演Ⅰ）	『発掘調査から見た広島県の中世城館』
		小都　隆（広島県文化財保護審議会委員）
	（基調講演Ⅱ）	『戦国時代の山城を掘る－発掘調査で明らかになった山城の実像－』
		中井　均（滋賀県立大学教授）
	（シンポジウム）	『城館研究最前線－発掘城館から探る中世社会－』